

目次

旅の終わり

第一章

旅の始まり

魔女の家

暮らしの中の呪い

いくつかの繋がり

アブエラのランチョ

死者の日

南部へ

シャーマンに気をつける

麻薬か、儀式か

グアダルーペの聖母

英雄の末裔

オアハカへ

版画とデモ

堀の中の版画

オアハカのクランデーロ

ドラッグ云々

本物の謝肉祭

第二章

呪術的技術

世界の境界

ばらばらの現実

勝負の行方

聖なるもの

宇宙からの知らせ

サン・ルイス再び

村への道

祝いの儀式

村の暮らし

マラカメは語る

ヒクリの危機

ランチョ・メタテイータ

出発

砂漠へ

オアシスにて

聖地ウイリクタ

犠牲

燃える丘へ

あとがき

旅の終わり

今日は二〇二五年三月五日。ちょうど一年前のこの日、僕はメキシコに滞在していて、ハリスコ州に住むウイチョル族の巡礼に同行し、「燃える丘」の頂に立っていた。そこは彼らの巡礼の地、ウイリクタと呼ばれる聖地の最終目的地であると同時に、一年間のドキュメンタリー制作という僕の旅のピークだった。それに何か、メキシコを訪れるよりずっと前から始まっていた、より長い旅の終わりをもし感じさせるものだった。

砂漠地帯の乾ききった大気と三〇〇メートルを超える標高。紫外線はいっそう強く降り注ぎ、彼らの鮮やかな民族衣装の彩度をさらに上げる。空の色は、宇宙を透かし見るように深くなる。後日、編集でこのカットを確認した時に、カメラの設定が狂っていたのかと思ったほどの青だった。頭上に広がるその青の中に一本の飛行機雲が流れていて、「前はこれから帰るのだ」と言っていた。

第一章

旅の始まり

このドキュメンタリー制作の企画は、地元である北海道の海外研修制度「ほっかいどう未来チャレンジ基金」の助成を受けていた。企画のタイトルは「メキシコの精神文化研究を通じた映像制作」とした。メキシコで克蘭デローと呼ばれる治療師をリサーチしながら、その過程を映像に収めるというもの。克蘭デロー、治療師とは、つまりシャーマンのこと。

僕は宗教や心理学、精神世界と呼ばれるものに、長らく関心があった。十代の頃より家族や親しい友人に精神的な問題を抱える人が多かったし、両親が早くに亡くなったこともあって、心や精神や魂などの、物理を超えた領域について知りたいという気持ちを持つことになった。とりわけ「人の心はなぜ病むのかを理解したい」という欲求があって、やがてシャーマンへの興味につながっていった。

十代をスポーツ漬けで過ごしたから、身体は今でもそれなりに頑丈なほうだが、心身ともに疲弊しきって病んだ時期があった。二〇代の初めだった。一緒に暮らしていた父、祖母が続けて他界し、札幌の実家を引き払って東京に出た後、自分の愚かさ故の人間関係のトラブルも続き、鬱、ノイローゼ状態になった。子どものころに患っていたアトピーも再発した。数年前まで自転車競技の選手だった自分が、たった百メートルのランニングもできなくなった。まるで自らの体とは思えなく、生きることと全く自信がなくなり、頭の中

では自己否定がぐるぐると渦巻いて、メダルやトロフィー、小中学校の卒業アルバムなど、全てゴミの日に捨ててしまった。

辛い命までは捨てなかったので、今、こうして旅行記を書いている。体のために鍼治療に通い、テラワード仏教（初期仏教）のお寺で瞑想を習ったりして生き延び、それ以来、精神について知る＝自分を守る術、という観点が加わって現在に至っている。

その二〇代前半の危機を経て、僕はアートのセラピー的な側面に、漠然と興味を抱きはじめて。当時はアートセラピーという言葉すら知らず、ただおぼろげな感触として、アートにはそういう働きがあるのではないかとだけ思っていた。

後々、世の中にはアートセラピーというものが存在し、専門家がさまざまなメソッドで活動をしていることを知った。ただ、他者に「アートセラピーを学びたいのですね？」と問われると、それもまた違うのだった。僕の関心は、そういった効果があるのか、ありえないのかも含め、自分の創作や活動の中に見出したり発見したりしていくことだ。そのため、どうしても「アートのセラピー的な側面」と回りくどい表現になってしまう。

アートと結びつくような心理学や人類学の本を読んでいると、しばしばシャーマンが登場する。伝統的なコミュニティの中の医師であり、呪術を駆使した儀式的司祭、神々の住む世界の語り手であり、詩人。それは読めば書いてあるのだけど、結局はテキストの中の存在でしかない。なんでもこの目で確かめたい性質がある自分は、いつか実際にシャーマンという存在に立ち会ってみたいと思うようになっていった。

魔女の家

二〇二三年九月七日、太平洋を渡るフライトを経てメキシコ・シテイに到着した。初めてのラテンアメリカ。これまでの海外経験は最長でも四ヶ月月弱で、名所を忙しなく歩き回る旅行だったり、テントを積んだ自転車での旅だったりしたが、今回は海外に一時的に居住することになる。荷の詰まったスーツケース二個を引きずりながら、空港タクシーに乗り込んだ。

メキシコ日記より

九月八日

フライトの疲れが重い。十時半起床。パスタを食べる。既製品のとマトソースは添加物で舌が疲れる感じがする。散歩がてらスーパーへ行く。トルティーヤとハーブ、辛い

ソースを買い足す。商店風の小さなスーパーは暗い。ガードマンが入り口にいる。

九月十一日

ローマ地区まで三キロほど歩く。ソノラ駅の周りは屋台だらけ。ビル工事。昼休みにポケットパークで横になる工事現場の人々。道すがらのプリントオフィスで絵本の英訳を印刷する。やる気のない横着な店員。パン屋で天然酵母のバゲットを求め、小さな画材店へ。リオ・デ・ハネイロ公園の噴水に立つダビデ像。その奥に聖堂の塔が見える。警察官の分厚い防弾チョッキ。

九月十四日

昼に起きる。昨夜寝る時に吐き気がしたので、風邪か食あたりかと思っていたが、具合が悪い。なんとも言えないムカムカがお腹全体にあり、頭もぼーっとして体に力が入らない。

海拔二三〇〇メートルのメキシコ・シティで高山病に罹っていたと気がついたのは、後になってから。普段どおりの運動による体調回復を図って公園でランニングをし、余計に高山病を悪化させていた。

九月十一日に寄ったリオ・デ・ハネイロ公園の脇に、赤茶の煉瓦の古い集合住宅があった。一階部分には飲食店舗がいくつか入っている。そのひとつは「Las brujas」という名のバーで、意味は「魔女たち」。かつてここは伝説的なクランデーロである女性、パチータが住んでいたアパートだったと、数日後に知った。

パチータという名前は、この旅のひとつの足がかりだった。十年ほど前、友人の薦めでアレハンドロ・ホドロフスキーという映画監督の作品を見はじめた。ホドロフスキーは、アヴァンギャルド時代のカルト的な映画監督として知られている。彼の自伝小説を読むと、彼が始めた「サイコマジック」という活動について詳細に記されていて、僕は大きな関心を持った。それは、心理的問題、パニック障害などを抱える相談者に対して、各々の問題に応じたパフォーマンスを処方し、その克服を促すというもの。シンプルに言えば、アートパフォーマンスを応用したセラピーと言えそうなものだった。

最も簡単な例を挙げると、引越し先の部屋に馴染めないひとりの女性に対しては、こんな処方。

「容器に小便をしてスポイトで吸い取り、新居の隅々に一滴ずつ注ぎなさい」

象徴が込められたパフォーマンスは、人間の無意識へ働きかけることができ、それは、日常で私たちが使う意識的で論理的な言語以上に心理的な効果を持つ、と彼は解説していた。

サイコマジックが生まれた経緯を読んでいくと、ホドロフスキーがメキシコで活動していた七〇年代に、メキシコのクランデーロの治療に接する機会があり、それがインスピレーションになっていったと記されていた。そのクランデーロがパチータなのだった。彼女は心霊的な外科手術さえも行っていたという。

暮らしの中の呪い

メキシコ・シティは千万近い人口を抱え、十二本の地下鉄が走る巨大都市。世界の他の大都市と同様に、中心部には巨大なオフィスビルやショッピングモールがそびえている一方、その裾には路上屋台が立ち並び、タコスの肉を焼く煙と匂いがもうもうとしていた。

食品、生活用品の購入はスーパーマーケットで事足りるが、安い食材を求めて、よくメルカドと呼ばれる市へ通った。各地区ごとにあるメルカドは、平屋の倉庫のような外観。スーパーマーケットとは異なり、個人商店の集合体で、八百屋、肉屋、魚屋、花屋、スパイス屋、食堂がひしめく。

その中で異物として目に留まったのは、呪いもの屋。「呪い」という字面は禍々し過ぎるが、そうとしか言いようがない店で、お清め、お祓いに使う薬草の束や、蝋燭、お香、各種の精油が並んでいた。十月末のメキシコ版お盆「死者の日」を控えていたせいか、ドロクロの飾り物なんかも売られていた。十箇所以上のメルカドに行っただと思うが、ほとんどにこういう店が入っていたから、生活必需品ということだろう。

メキシコ・シティにはソノラ市場という呪物専門のメルカドも存在する。生贄用の動物もそこで買うことができるらしい。興味が無くはなかったけれど、現地に「危ないから一人で行くのはやめた方がいい」と言われて後回しにしていたら、結局、ソノラ市場は行かずじまいになってしまった。

いくつかの繋がり

はじめのひと月を過ごしていた宿は、メキシコ在住の友人に紹介してもらった部屋で、個人の家の離れだった。アーティストであるオーナーは、自宅の一階部分をギャラリーに

改装している最中だった。そのギャラリーが完成して、九月二十二日の夜にオープンングパーティーが開かれた。その中の数人に、自分の企画について話をする、アルファという作家が興味を示してくれた。彼はパチータのことも知っていて、そういうことならベラクルス地方の南に行くと良い、もしくは北部のチワワ地方だな、とアドバイスをしてくれた。

はるばるメキシコまで来たものの、日本での準備段階で取材対象や地域を決定することまではできなかった。こうやって人づてに探っていくほかなかった。一度会場を出たアルファは、日付が変わる頃に友人を二人連れて戻ってきた。二十代に見える彼女らは、日本で言うならギャルというか、イケイケな風貌。そのうち一人はマリファナ（現在のメキシコでは合法）をプカーツと一服ふかしたかと思うと、政治の不平等、マルクス主義、ネット時代におけるイメージの価値、といったテーマで激論をまくし立てた。

閑静な住宅街の一角にある会場は、日本なら警察に通報されるようなボリウムで音楽を流し、それぞれが好きに飲んだり踊ったり、マルクスを語ったりしている。これがメキシコのフィエスタ（パーティー）かと納得していると、オーナーのiPodに繋がれたスピーカーから、ある懐かしい音楽が流れてきた。それは父が持っていたレコード、一九六六年リリースのブラジルのミュージシャンのアルバム『Os Afro-Sambas』に収録されている一曲だった。

これを初めて聞いた時、僕はおそらく十六歳だった。父は札幌のすすきで飲み屋を営んでいて、店ではロック、ソウル、ジャズ、ラテンと、ジャンルを問わず、いろいろなレコードがかかっていた。父は自分から「このアルバムが良い」とか「俺はこれが好きだ」といったことを言わない人だったが、僕が時々「何か面白いレコード出して」と頼むと、「こんなのどうだ」と言って用意してくれるのだった。

その『Os Afro-Sambas』もそんなレコードのうちの一枚で、単純に好きで何度も聞いたけど、それは他のブラジル音楽とは違い、どこか出所の異なるような、何かとても遠くから聞こえてくるような音だった。当時はその文化的背景を調べたりはしなかったけど、後々知ったのは、このアルバムは「カンドンベ」というイタコの儀式の歌がベースとなっていて、それらを現代的にアレンジした曲集だということ。おそらくそれが、僕にとって最初のシャーマニズムとの接触だった。

こんなマニアックな曲に懐かしさを覚える人間が世の中にどれほどいるのかは知らないが、このフィエスタでは、皆その音に体を揺らしている。午前二時まで続く騒ぎの中、散乱した大量のビール缶を拾いながら、この土地でなら何かが繋がって行くかもしれないと

朧げに感じた。

メキシコに到着した時、現地に幾人かの友人がいた。初めて訪れる土地で案内人に恵まれ、運が良かったと思う。一人はリタといって、ペルー出身のアーティスト。七年ほど前、友人でアニメーション作家の松本力さんを東京で訪ねた際、「ちょうどメキシコから友人が来ている」ということでリタを紹介されたのだった。その日はリタの希望で、三人で慶應大学の「舞踏研究室」を見学した。どうしてメキシコから来て舞踏なのかと訊ねたところ「メキシコでは舞踏がとても流行っていて、コンテンポラリーダンサーの多くが舞踏に取り組んでいる」という答えで、僕は驚いた。リタは何度か松本さんをメキシコでの現地制作に招いていて、彼は僕にメキシコの話聞かせてくれた。僕もいつか行ってみたいと言うと、「その時が来たら行けますよ」と松本さんは答えた。思えば、この時の舞踏研究所の出会いからすでに、メキシコ旅は蟬の幼虫のように地中で眠っていたようだ。

札幌で知り合った、アメリカ人のジャズトロンボーン奏者がいて、時々話をするうちに、彼がメキシコでも活動をしていることを知った。旅の相談にのってもらい、ちょうどメキシコでの滞在時期も重なった。メキシコ・シテイに住む彼の友人も紹介してもらい、いろいろとお世話になった。彼女はルピタといって、詩人、そしてシェフでもある。彼女のアパートの部屋は中庭があり、ハチドリが蜜を吸いにやってくる。ルピタは何度か日本を旅したことがあり、その文化にずっと興味をもっている、中国や日本の自然と密接な文化は自分にとって魅力的だ、と語ってくれた。

そんな彼女の悩みは、上階に住むキューバ人の司祭だという。彼らはサンテリアという儀式を行うことで知られていて、メキシコにも随分浸透しているらしい。その司祭は依頼を受けると、祈祷のために生贄を行う。普段は主に鶏を用いるが、大掛かりな時には羊も屠る。きっと、例のソノラ市場で仕入れるのだろう。その断末魔の声が階下の彼女の部屋まで聞こえてくるのが耐えがたいのだと、ルピタは訴えた。「その生贄も、自然と密接な文化じゃない？」とからかうと、彼女は「生贄は勘弁して」と笑った。

九月の末、プロジェクトの受け入れに尽力してくれた三浦里美先生に会うため、コレヒオ・デ・メヒコ大学に行った。郊外にある大学は穏やかだったが、正門前にはマシガンを持った警官が常駐していて、治安のほどを垣間見る。三浦先生が昼の会議で配るといってお弁当の受け取りを手伝うことになり、大学から歩いて二〇分ほどの日本料理店に向かった。店内の客席には日本人がいて、三浦先生とは旧知の様子。「横尾咲子さんです」と紹介され、びっくりする。リタから「きつと、良い縁になると思うから」と連絡先をもらっていた人だった。メキシコで会いましょう、と約束はしていたものの、まさかこんな郊外の店で偶然会えるとは。

聞くと、横尾さんは舞踏ダンサーとして活動した後、メキシコに渡り、この地で尼として得度をしたとのことだった。リタが東京で舞踏研究所に行きたがったことを思い出す。あらためてこの旅の目的を話すと、ドン・ホセというウイチヨル族のシャーマンの友人がいるから紹介できますよ、と言ってくれた。そこから紆余曲折の五ヶ月間を経た後、僕はドン・ホセを頼ってウイチヨル族を訪ね、ドキュメンタリー『巡礼の季節 ―ヒクリ、八〇〇〇と二〇〇年』を制作することになる。

横尾さんの夫で舞踏家であるエスパルタコは、ドン・ホセと共演もしているとのことだった。後に知ったが、横尾さん夫妻がかつて所属した舞踏カンパニーは「大駱駝艦」で、僕の学生時代の恩師の望月先生は、大駱駝艦の創設期にポスターを制作していた。卒業する時、記念にと譲ってくれた七〇年代当時のシルクスクリーン刷りの公演ポスターは今では先生の形見になっていて、ちょっと不思議な縁も感じる。

ばったり横尾さんに会ったその翌々日、大学の田中道子先生のお宅にアジア・アフリカ研究の学生が集まると聞き、お邪魔させてもらった。人類学、政治経済から日本の軍歌まで、いろんな研究をする学生たちがいた。僕は客員研究員として受け入れてもらったとはいえ、所属学生ではないから、彼ら学生と直接に接する機会はほとんどなく、貴重な交流の時間だった。

東南アジア専攻のジャクリンからは、いくつか僕の企画に関わる情報をもらうことができた。彼女に教えてもらったドニャ・ペトラという存命の克蘭デーロは、現代のパチータとも呼ばれているという。調べてみると、この克蘭デーロは北部のソノラという地方に住んでいて、インタビュ어가 YouTube にも上がっていた。インターネットで観られるなんて、いかにも二十一世紀的だなと思うながら試聴してみると、こんなやりとりがされていた。

「あなたは癌などの治療もしていると聞きますが…」

「そんなもの、私には風邪とおんなじだよ」

現代のパチータと聞くと、じっとしてはおれないが、ソノラは遠い砂漠地帯。ソノラのどこにいいのかもわからないのは為す術もないので、一旦、ドニャ・ペトラの取材は保留案件とした。

結局、はじめの一ヶ月は時差ボケ、高山病と闘いつつ、生活必需品の調達、移民局での煩雑な手続き、大学や紹介してもらった人々への挨拶をしているうちに過ぎていった。

十月初旬、メキシコ暮らしに妻が合流し、別の部屋に引っ越しをした。中心部から少し

離れたアパートの屋上部屋で、赤っぽいオレンジ色の花がたくさん咲く鳳凰木という木が生えていた。そこにやってくるいろいろな鳥の中にはハチドリもいた。妻は酉年生まれの鳥のような女だから、集まってくる仲間たちにパンをやり、新しい歌を歌って過ごす。

屋上から見える、公園になっている中央分離帯には毎週、定期的に市が立つ。ピンク色のテントが並ぶこの路上市は、ティアングスと呼ばれるメキシコ名物のひとつだと聞いた。